

責任者、出て来い！
怒りのスクープ告発 後編

頼みの専門家は語った。「甘かった」とまだまだあるゾ 原発直近活断層「ユルユル審査」のヤバすぎる実態
（『週刊プレイボーイ』二〇〇六年一月一三日号）

ひとたび大事故が起きれば、国土と国民を放射能で汚染し、破滅的な被害をもたらす「原発」。だからこそ、絶対的な耐震性が確保されていることが、原発立地の大前提となる。が、その大前提が今、大いに揺らいでいる――。

ルポライター・明石昇二郎 &
「責任者を捜す会」

各地で発掘される
「衣笠先生」の名

「受験生（＝中国電力）に間違った答えを教えた入試委員の先生が、受験生の不正解の答案に満点を与えて合格（＝原子力安全・保安院の安全審査）させてしまった」

ことが白日の下に晒された、今回の中国電力・島根原発3号機「活断層」**ザル審査問題**。先週報告したとおり、

中国電力の活断層調査と国の安全審査の両方に関わっていた「入試委員の先生」とは、**衣笠善博**・東京工業大学教授のことである。

その衣笠先生は我々の取材に対し、青森県六ヶ所村の日本原燃・使用済み核燃料再処理工場にまつわる「活断層」話も聞かせてくれていた。

国が同工場の安全審査に入る前年の1988年、再処理工場の敷地内には2本の断層が走っていることが明らかになり、当時これが「活断層」なのか、それともただの「断層」なのか、大いに世間の注目を集めていた。そし

て衣笠先生はこの時もまた、事業者である日本原燃（当時は日本原燃サービス）を「指導」していたのではないかと囁かれていたのである。現在、東工大教授である衣笠先生はこの時、通産省工業技術院地質調査所（現・産業技術総合研究所）の地震地質課長だった。

――先生、六ヶ所村再処理工場の時にも（事業者を）事前に指導をされていませんか？

「六ヶ所のご存じだったら一番簡単だ。六ヶ所のごことは国会で問題になって……」

――（88年11月22日の衆院科学技術委員会）議事録を拝見しました。

「あれにちゃんと書いてあるじゃない。専門家として発言していることだからまったく問題がないと、その当時の工業技術院のお偉いさんが国会でちゃんと発言をしておりますから」

――その議事録を見ると、「日本原燃が国に出した）申請書云々について指導してはいないか」というような誤解を招いたということについては私ども極めて残念に思っております、今後はかかるような誤解を招かないように、仮にいろいろなどころを見学されてもその発言については十分慎重になるよう十分配慮するように指導をしていきたい」とありまして……

「いやいや……」

――この時、先生は国の安全審査には関わっていらした？

「関わっておりました」

＊
となると、今年3月末から稼働している六ヶ所村再処理工場のほうでも「間違った答え」を教えていないか、心配になってくるではないか。

そこで、全国各地の原発付近で行なわれた「活断層調査」の周辺を調査し

てみたところ、各地で続々と衣笠先生の名が掘り出されてきた。

例えば、今年3月に金沢地裁から運転差し止めを命じる判決が言い渡された北陸電力・志賀原発2号機（石川県）である。同地裁は判決の中で、「被告（北陸電力）の想定を超えた地震動によって原発に事故が起こり、原告（住民）らが被曝する具体的可能性がある」

として、大地震による原発事故発生の危険性を認めていた。

この判決で金沢地裁の裁判長も注目していた「おおちがた邑知潟断層帯」（全長約4キロ）という活断層がある。日本政府

の地震調査研究推進本部（略称「すいほん推本」）によれば、いくつかの断層に分かれている邑知潟断層帯は一体となって活動すると推定され、発生する地震の規模はマグニチュード（M）7・6程度と見られている。これが耐震設計でなんら考慮されていない——として、同地裁は原発の運転差し止めを命じたのだった。

『毎日新聞』06年3月24日付の報道によれば、志賀原発2号機建設の際に考慮された活断層は、邑知潟断層帯に平行して走る「びじょうざん眉丈山第2断層」（全長約12キロ）。北陸電力では、これが引き起こすM6・6の地震と直下地震を想定し、耐震設計を行なったのだという。そして、北陸電力の活断層調査活動でもまた、衣笠先生の名前がたびたび登場していたのである。

その物的証拠（？）は、北陸電力の調査担当者らが執筆した95年3月の「邑知潟平野北西縁のリニアメントと断層」論文など。見るとその中で、「御指導、御助言をいただいた」

として、衣笠先生への謝辞が実にいねいに述べられている。また、別の

論文では、

「衣笠善博東京工業大学教授には野外でのご議論をはじめ本文のまとめに際して終始懇切なご指導をたまわりました」

とまで書かれていた。さらに、99年に発生した台湾の「チイチイ集集地震」を受けて結成された電力「チイチイ社」などによる「断層調査団」で衣笠先生は調査団長を務めるなど、まさに「**電力のヒーロー**」なのである。

ごりやく御利益なかった

「もう衣笠詣で」

まだある。高速道路や新幹線の橋脚がバタバタと倒れ、原発の耐震性が不安視される大きなきっかけともなったのが、95年1月の阪神・淡路大震災だ。これを受け、当時の科学技術庁が予算を出し、大規模な「活断層調査研究」事業が同年度からスタートした。

都道府県および政令指定都市単位で行なわれたこの「調査」も調査してみたところ、工業技術院地質調査所の地震地質課長から「首席研究官」に出世していた衣笠先生の名を**またまた発見**。

衣笠先生が参加した12の都県および政令指定都市のうち5つまでがなぜか原発立地県で、先生は原発に近接する活断層評価のすべてに加わっていた。

ここまで微に入り細をうがって衣笠先生のことを調べ上げたのには、当然のことながら訳がある。実は、電力関係者の間で使われている業界用語に、

「もう衣笠詣で」なる言葉があるからなのだ。だから今、電力会社の活断層調査担当者たちは、活断層研究者に対して

こうボヤクのだという。

「衣笠先生の言うとおりやってあげば問題ないのかなと思っていた……」

そこで我々は、先週号で報告したとおり、衣笠先生から「間違った答え」を教えられたことがすでに判明していた中国電力を取材した。お話は、同社CSR推進部門の報道担当者・Tさん。「衣笠先生は国の審査のほうの顧問の先生をやられているんじゃないかったですか？」

——そうですけど、同時に御社にもアドバイスをされていまして。

「ご本人に確認したんですね？」

——そうです。

そして翌日。

「例の指導を受けた先生方について（担当に）聞いたんですけど、『名前を公表してない』という回答でした。ずっと『公表できない』というところで通しているそうなんです」

——でも、誰が「指導」していたのか、こちらではすべて把握できちゃいましたよ。

「そうですね……すいません。いろいろな方の指導を受けているようではあるんですけど」

*

気の毒になるくらい狼狽ろうばいしていた。

「人心刷新まき」に勝る安全策なし

今回の「活断層」ザル審査問題では、電力会社は事実上の「被害者」と言えなくもない。より重大な責任があるのは、このような事態を長年にわたって放置してきた原子力安全・保安院のほうだろう。よって次のお相手は、同院・

原子力発電安全審査課の村山綾介むらやまりょうすけ課長補佐。

*

「我々は（島根原発3号機に関して）

いったんは「0キロということでは審査をしているわけですけども、それに固執するんじゃないくて、必要があれば中国電力に再評価させるとか、必要な対応というのを取ろうと」

——つまり審査ミスだったと？

「そこは何とも言えません。ただ（中国電力の活断層調査能力の欠如を暴いた広島工大の）中田（高）たかし先生のおつ

しやるのが何から何まですべて正しいかと言われると、それは必ずしもそうじゃないわけですよね」

——そうなんですか？

「別に神様じゃあるまいし、全部が正しいわけじゃないわけで」

——東工大の衣笠先生が審査の前に中国電力に呼ばれて、活断層調査の技術指導をしていますか？

「それ自体は問題ではないと思います。我々も衣笠先生のみ見解をもって審査しているわけじゃなくて、当時の通産省が審査しているわけであって、衣笠先生が中国電力とコンタクトがあったとしても、審査結果に問題が出てくるとは思いません」

——その衣笠先生が指導したにもかかわらず、調査が「甘かった」わけです。

「だから現段階では何とも言えませんが、結果的にそうなる可能性はあると思いますけども、我々としては最善を尽くす以外ないです。それに対して『でも大丈夫なの？』と言われても、もうそれはしょうがないですよね」

*

国民の命にも関わる話に「しょうがない」はないだろう。それに、島根3号機の審査に当たった通産省（当時）の「原子力発電技術顧問」リストによれば、「活断層の専門家」として関わっているのは衣笠先生ただおひとりである。

先週号で我々は、国の安全審査に関わっているながら、中国電力の活断層調査の指導をしていた人が2名いる——

と書いた。もうひとりとは、やまさきはるお山崎晴雄・

首都大学東京教授のことである。山崎先生は、国の原子力安全委員会（第二次審査）で島根原発3号機の安全審査（第二次審査）に関わる一方で、衣笠先生たちと一緒に中国電力を「指導」していた。前出の台湾「断層調査団」では副団長も務めている。ただし、山崎先生は我々の取材に対し、こう語っていたのだ。

*

「僕は島根の件には関係してないんです。原子炉安全専門審査会委員の中で部会をつくって、個別に（原子力安全委員会から）指名されて審査するわけですが、島根はやってない。審査会は3人ぐらいいるすごく大きな会で、その中のひとりとして最後に関わった程度で。だから具体的な話はあまりよく知らない」

——中国電力さんが3号機増設のために行なった活断層調査に、山崎先生も関わっていらしたのでは？

「だから、**今度の審査なんかには一切関係してない**んですよ、私は」

——**けじめ**として、一歩身を引かれたわけですか？

「そうです。だから実際の調査とか、判断をするところには一切関わっていない」

——電力にアドバイスされていた方が審査側にも加わるのは、いらぬ誤解を招く恐れがあるとは？

「そういうこと。だから僕は一切タッチしない。耐震指針（改定）のほうにも僕は一切関係していません。そうしないと、やっぱり話がおかしくなる。審査があるということであれば、当然自分から（部会委員を）はずれます。島根では安全委員会からも指名されなかったし」

*

「一切」は少々言い過ぎだとは思いますが、原子力安全・保安院の村山補佐や衣笠先生にこそ、聞いていただきたい

言葉である。

原子力安全委員会における島根原発3号機の安全審査で、地質・地盤・地震などに関する審査の責任者だった

おたけまさかず

大竹政和・東北大学名誉教授（前・日本地震学会会長）は、こう話す。

「審査が間違っていたんだったら、その審査のやり直しをすべきだと思います。大切なのは事実関係をきちんと確認をして、それが確認されたら、再審査をするべきであると。現在、**安全委員会**は**そういうところに向かって進んでいない**。今そういう具体的な措置を取られていないので、**きちんとした対処をするように私は働きかけます**」

わかっているなら早くやって下さい。大地震が起きる前に急いでお願いします。国民からのパブリックコメントを無視した上に、あくまでその場しのぎの対応に終始するならば、もはや原発の安全審査体制の**解体的見直し**しか道はあるまい。

※この「原発直近活断層」ザル審査問題については、二〇〇七年に榊金曜日から刊行しました拙著『**原発崩壊**』の中でより詳しく紹介しております。ご関心のある方はこちらでも合わせてご参照いただくと幸いです。

配信元・ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇一郎

URL: <http://www.rupoken.jp/>